

川東 淨弘著 『帝国農会幹事 岡田温

——一九二〇・三〇年代の農政活動——』上巻・下巻

深見 貴成

はじめに

本書は、帝国農会幹事として活動した岡田温（一八七〇年～一九四九年）の活動、特に農政活動について、岡田の日記をもとに詳細に明らかにしたものである。著者の川東 淨弘氏は、これまで岡田温の研究を精力的に進めてきており、『帝国農会幹事 岡田温日記』<sup>(1)</sup>や『農ひとすじ 岡田温—愛媛県農会時代』<sup>(2)</sup>など、岡田の史料を世に知らしめてきた。

一方で、近年、帝国農会をはじめとした系統農会の研究が進められており、松田忍氏は近代における系統農会につ

いて分析をおこなっている<sup>(3)</sup>。松田氏の著書では、松山大学に所蔵されている岡田温の史料が数多く参照されている。現在、帝国農会をはじめとした系統農会研究を進めるには、『岡田温日記』などの岡田温関係史料は不可欠な存在であると言える。

本書は、副題にある通り一九二〇年代から三〇年代の岡田の活動を克明に追ったものであり、この時期は昭和恐慌の発生という農会にとつて大きな画期となることから、岡田個人というよりも、帝国農会や全国の系統農会の活動について分析するものであるということができる。

本書の構成は以下の通りである。

(上巻)

序論 (三頁～二六頁)

第一章 大正後期の岡田温

第一節 帝国農会幹事活動関係 (二九頁～三二五頁)

第二節 講農会・東京帝国大学農学部実科独立運動

関係 (三一五頁～三三三頁)

第三節 自作農業・家族のことなど (三三四頁～三

四五頁)

第二章 昭和初期の岡田温

第一節 帝国農会幹事活動関係 (三四八頁～五一六

頁)

第二節 講農会・東京帝国大学農学部実科独立運動

関係 (五一七頁～五二二頁)

第三節 自作農業・家族のことなど (五二二頁～五

二七頁)

第四節 温の農業経営と農政論 (五二七頁～五五六

頁)

(下巻)

序 (五五九頁～五六〇頁)

第三章 昭和農業恐慌下の岡田温

第一節 帝国農会幹事活動関係 (五六二頁～九七七

頁)

第二節 講農会・東京帝国大学農学部実科独立運動

関係 (九七七頁～九八六頁)

第三節 自作農業・家族のことなど (九八六頁～九

九八頁)

第四節 温の農村経済更生論 (九九八頁～一〇〇六

頁)

第四章 昭和農業恐慌回復期・日中戦争期の岡田温

第一節 帝国農会幹事・特別議員活動関係 (一〇〇

八頁～一二二八頁)

第二節 講農会・東京高等農林学校関係 (一二二八

頁～一二三〇頁)

第三節 自作農業・家族のことなど (一二三〇頁～

一一三八頁)

第四節 温の土地制度改革論 (一一三九頁～一一四

七頁)

おわりに (一一四九頁～一一五六頁)

目次と構成を見て一日瞭然であるように、岡田の活動を時系列的に追いつつ、そのほとんどが帝国農会の幹事の活動についての記述である。既に松田忍氏が本書の書評で指摘しているように、アンバランスな章構成であるが、これは岡田がいかにかに帝国農会の幹事として精力的に活動していたかを示すものとも言えよう。

## 一 本書の問題点

さて、通例であれば対象書の成果を確認したうえで、その問題点を確認する書評が一般的であるが、本稿ではまず本書の問題点から確認したい。それは本書が出版された意義に関わる論点と考えられるからである。

第一に、本書の最大の問題点は、研究書として極めて通読しにくい、ということに尽きる。その例をいくつか挙げたい。

本書は『岡田温日記』の記述をもとに叙述が進められていくが、日記の記述をほぼそのまま踏襲して叙述されていると思われるために、非常に読みにくい文章となっている。

例えば、一九二四年（大正一三）四月一日の『岡田温日記』は次のように書かれている。

四月一日（火）晴。

朝、富永君ト郡中町ノ有志七、八戸ヲ訪問ス。十時過ヨリ野村、隅田、富永諸君ト自働車ニテ上灘及下灘村ヲ訪問シ、役場及有力ナル有志一、二ヲ訪問シテ、五時過大谷旅館ニ帰ル。（中略）

野村君ト岡田村ニ至リ、有志三、四十名ノ会合ニ挨拶ヲナシ、所感ヲ述へ、松山ニテ理髪ヲナシ終列車ニテ帰宅。（以下省略）<sup>(5)</sup>

これに対し、本書の記述は以下の通りである。

四月一日、温は朝から伊予郡に行き、富永安吉（喜多郡三善村長、前、喜多郡農会技手）とともに郡中町の有志七、八戸を訪問し、一〇時過ぎから野村茂三郎、隅田源三郎（伊予郡農会技手）、富永らと自動車にて上灘村、下灘村に行き、村の青年有志と懇談し、さらに野村とともに岡田村に行き、有志三〇余名の会合に出席し挨拶をした（本書一五七頁、以下断りが無い限り、頁数は本書のもの）。

このように、本書の記述は『岡田温日記』をもとに岡田の日々の行動を記載した叙述であることがわかる。岡田がどこへ行き、何をしたか、そしてどこへ出張して何という旅館に宿泊し、次の日に何駅の何時発の列車に乗って移動した、といった叙述が一九二一年（大正一〇）から一九三八年（昭和二三）まで、ずっと続くのである。評者は本書と『岡田温日記』をすべて照らし合わせたわけではないが、このような岡田が何月何日にどのような活動をした、という記述は、日記を元に叙述されていることは間違いないだろう。このような叙述は、読者にとって岡田のどのような活動がこの時期にとって重要で、どのような意味があるか、ということがわかりにくく、非常に読みにくいものであると言わざるをえない。

他の例としては、岡田が矢作帝国農会副会長と内藤友明参事の問題（後述）について話した際のことを、本書では「矢作先生の心が動いたようだ」（二八八頁）と述べているが、これは『岡田温日記』の「先生ノ心動キタリ」という記述を元にしたと思われる。歴史的分析の叙述に「矢作先生」のような岡田の認識をそのまま持ち出して記載するのは不適当に思われる。このような岡田の認識そのままの叙

述が本書には非常に多い。

以上のような、日記を元にして岡田の動きを刻々と追う叙述は、岡田が帝国農会幹事という要職にあり、そして後に述べる衆議院議員であった時期も含めて、一つの事実も見逃さない、という著者の真摯な姿勢の表れと言える。著者は「おわりに」で「本書によって、明らかになった点、及びファクト・ファインディングと思われる諸点」（一一四九頁）をまとめるとしており、この「ファクト・ファインディング」、つまり事実を確定させるということに重きを置いた叙述であることが著者の姿勢を端的に示している。しかし、読者にとっては、本書から岡田のどのような活動がどのような意味を持つのかということや、岡田や系統農会の果たした歴史的意義を理解することは非常に難しい。著者は本書の内容を「おわりに」で一七点にわたってまとめているが、本書が最も明らかにし、歴史的意義を強調したかった点はどこにあるのか、評者にはわからなかった。また、本書二〇頁から二五頁にかけて、『岡田温日記』に登場する膨大な人物が記載されているが、索引以外にこのように本文中に掲げる意味はどこにあるのだろうか。これは本書全体にも言えることであり、本文中に岡田に関

わった膨大な人物が登場する。しかし、あまりに膨大すぎ、岡田の活動にとって鍵となる中心的な人物が誰であり、それはどのような関係にあったのか、この膨大な登場人物の中に埋もれてしまい、理解することは困難であった。

なお細かい話であるが、本書では柱（見開きの左上の部分）に「第一節 帝国農会幹事活動関係」という節名しか記載されておらず、その頁がいったい何年何月の話をしているかわからず、これがいつの時期について述べているのかわかりにくい原因となっている。

第二の問題点として、本書では岡田の日々の行動とともに、岡田が雑誌や新聞、会報などに執筆した原稿の内容を一つ一つ紹介しているということがある。多くは何月何日に何々という原稿を書き上げ、「その大要は次の如くで」として岡田の原稿の内容の要約を挙げている。この岡田の原稿の要約は本書内でも非常に多くの分量を割かれているが、しかし、このような岡田の論説の要約をすべて叙述する必要がどこにあるのか、評者にはわからなかった。

例えば、岡田が帝国農会の筆頭幹事となった一九二八年（昭和三）の活動について、本書では四一四頁から四六一頁にわたって記述しているが、その中で約一一頁分が岡田

の一〇の論説の要約である。これらも、岡田の議論の一つでも見逃すまいという著者の姿勢を表したものであるが、岡田の論説の意義についての説明がないために、読者にとっては本書の理解を妨げるものとなってしまっている。

また、このような岡田の論説の要約は本書が取り上げる大正後期から昭和期にかけて続くが、一方で、本書には岡田の論説一覧や索引がない。これでは岡田がどのような意見の変遷をたどったか、もしくは一貫した意見を訴えたか、読者には理解しづらい。

この論説の要約という問題と関連して、第二章第四節に「温の農業経営と農政論」として岡田温『農業経営と農政』（龍吟社、一九二九年）について、第三章第四節「温の農村経済更生論」として同『農村更生の原理と計画』（日本評論社、一九三三年）について、そして第四章第四節「温の土地制度改革論」として同『農業経営の再検討』（龍吟社、一九四二年）について述べられている。しかしそれは岡田の著書の要約のみで、どの点が岡田の主張の特質なのか、それが大正から昭和期の時代にとってどのような意味があるのか、岡田の主張の変遷の有無やその意義などについては述べられていない。

これらの岡田の著書は、日本国内の大学附属図書館などに所蔵されており、原著を見ることはそれほど難しいことではない。それをこのように上下巻すべて合わせて約四七頁も割いて要約を述べることの意味はよくわからなかった。前述した論説一覧の欠如も含め、読者には不親切な内容であると言わざるを得ないだろう。

以上のような、岡田に対する分析の欠如がある一方、著者は岡田に対して歴史的分析を超えた評価をしていると感じられる叙述がある。例えば、「これまでの研究史では小農論者＝温はほとんど無視されていたが、本書により、その名誉が回復されることを願う」（二一五頁）といったものや、「第一七に、温の人物についてである。人物の良さは抜群である。性格は温和で、謙虚な性格の持ち主であった」（二一五四頁）といった記述である。小農論者であることや人物の性格といったことは、歴史的分析において重要な要因であることには間違いないが、「名誉が回復」されるか否かは歴史的分析がなされた後の話であろう。このような著者の姿勢が、本書の歴史的分析の欠如を招き、読者との対話を重視しない本書の構造につながったのではないかと評者は考えた。

本書の問題点として最後に述べたいのが、これまでの研究史との関係である。「序論」で著者はこれまでの岡田温に関係する研究を挙げ、「これまでの農政のリーダーや小農論を取り扱った研究史では何故か（岡田が―評者）一切取り上げられていない」（一三頁）としている。一方で、岡田の農業論や農本主義論に関する研究については武内哲夫氏、武田共治氏、野本京子氏、松田忍氏の研究を挙げている。つまり、これらの研究にはない視角や論点を本書では提示したいということであろう。

しかし、「おわりに」で述べられている「明らかにした点、及びファクト・ファインディングと思われる諸点」は、これまでの研究との関連性が不明なものが多い。例えば、岡田が出版した『農業経営の再検討』（龍吟社）の概要をまとめた上で（前述の通り、概要を述べたのみでどの部分が重要であるか等の検討はなされていない）、「この骨子は、敗戦後の日本の第一次農地改革と大変よく似ている。温の考えを戦後の農林官僚たち（和田博雄農政局長、東畑四郎農政課長ら）が取り入れたと推定して誤らないだろう」（二一四七頁）と言い切っている。しかし、農地改革に関する研究は膨大にあるが、どのような研究を念頭に置いてこのよ

うに断言するのか、まったく不明である。本書によれば、岡田は和田や東畑と数多く接触している訳でもなく、「大変よく似ている」ことだけを理由にするのは、あまりに強引な推論と言わざるを得ず、そもそもどの部分が類似しているのかの言及もない。

以上のように、本書は岡田温を取り上げて昭和恐慌を挟んだ日本の農村にとって、そして帝国農会や系統農会にとって重要な時期を取り上げた貴重な成果であるが、その提示の仕方は大きな問題点を抱えていると言わざるをえないものである。

## 二 本書の成果

ここまで本書について批判を加えてきたが、一方で岡田温が大正期以降の系統農会とそれに関連する活動の中心となり、それが国家の農政に大きな影響を与えたことは疑い得ず、それらが明らかになったことが本書の大きな成果であることは間違いない。

また、系統農会の活動や農政運動が大正期の政治史の中で重要な位置を占めていたと考えられることが、本書から浮かびあがった。大著である本書であるが、評者の力量不

足から、それを以下三点のみに絞って述べていきたい。まず、岡田の衆議院議員としての活動についてである。<sup>(7)</sup>

「おわりに」でまとめられているように、「温は大正一三年五月衆議院議員に当選し、農業・農村派の議員として、議会で昭和三年二月まで活動して」（一四九頁）いた。岡田は、帝国農会が政友本党系であったことから、いったん立候補断念を決めたが、一九二四年（大正一三）三月二〇日、立候補を決意した（一四九―一五一頁）。この岡田の選挙戦を応援したのが、「職場を一ヶ月近く休み、選挙に張り付いた帝農参事・内藤友明」（一六二頁）であった。総選挙後、内藤は「古瀬（伝蔵、雑誌『農政研究』の編集者―評者）らとともに農民党の結成に動いたことなどが矢作（栄蔵帝国農会副会長、後に会長―評者）らの逆鱗に触れ」（一八二頁）、最終的に辞職することとなった。この農民党の活動については、鈴木正幸氏や野本京子氏の研究以降、近年は研究が深まっておらず、非常に興味深い事実と言える。<sup>(8)</sup>

内藤が古瀬伝蔵らとともに瑞穂会・全国農政団連合の結成に動いたことは、鈴木氏によって指摘されており、岡田が同年九月一四日に矢作副会長に内藤解職の話聞きやむを得ず了承した際に、「内藤君問題解決ス。最大苦痛ヲ味

フ」(二九〇頁)と日記に記したのもこれらの動きと関係があるのは間違いない。一方で内藤は、翌一九二五年(大

正一四)一月に岡田に帝国農会幹事の辞任を勧めに来ており(二一五頁)、その後の岡田と内藤の関係がうかがえる。また、さらにその後も岡田は内藤の就職の斡旋に動いており、一九三三年(昭和八)三月には富山で内藤に会い、帝国農会入りを勧誘している。しかしその際、岡田は「同君ハ已ニ政治的方面ニ深入過キタリ」(八〇三頁)と感じており、これらのことから、内藤との関係は維持しつつも、

内藤の活動には全面的な賛意を持っていたわけではないことがわかる。ここで問題になるのが、内藤の動きである。このような内藤の活動と岡田の活動とはどのような関連があったのであろうか。そしてそれは農政運動全体の中でどのようにとらえればよいのであろうか。今後の研究の進展が待たれる。

第二に、農山漁村経済更生運動と岡田温との関係である。著者は「おわりに」において、「これまでの研究史では、石黒忠篤や小平権一は必ず出てくるが、温の活動にはほとんど触れられなかった」(二一五二頁)が、岡田が資料を農林省に提供し、主旨説明や指導に回ったことから、「温抜

きに農村経済更生運動の実際は語られないことが判明」(二一五二頁)したとする。

これらのことから、更生運動は帝国農会をはじめとした系統農会の役割が非常に大きいとしている点は、これまでの更生運動の研究史にはない視角であると言えるが、一方で著者はこれまでの更生運動研究との関連性について述べていない。森武磨<sup>10)</sup>氏や平賀明彦<sup>11)</sup>氏をはじめとした更生運動に関する研究は膨大に存在するが、それらのどの研究を意識しているのか不明である。

しかしながら、更生運動が開始された時期に岡田が農林省に何かしらの形でつながっていることは間違いない、それをどのように更生運動研究に反映していくかが今後の課題となろう。

第三に、帝国農会と道府県農会との関係についての指摘である。著者は「おわりに」で「関西の農会の主要メンバー(中略)は、帝農幹部の農政運動の生ぬるさに批判的で、しばしば、下からの突き上げを行ない、帝農を動かした。(中略)また、関西府県農会は農村救済の全国大会の開催を帝農に要求し、開催されるなどした」(二一五二頁)とまとめている。著者が指摘するように、例えば、一九三



○年（昭和五）七月の道府県農会長会議では会長不在の不満が続出したり、同年十一月におこなわれた全国農会長大会では、岡田が決議案を朗読した際に「熱狂する群衆が壇上上がり、絶叫」するなどの「帝農への不満、危機感、熱気」（六一〇頁）があつたりと、昭和恐慌期には帝国農会への道府県農会からの突き上げが強くなつていったと考えられる。この帝国農会と関西府県農会聯合については、松田忍氏も「洪る帝国農会を押し切つて、（一九三六年に―評者注）農会の制度改革を断行させた<sup>12</sup>」としている。

このような帝国農会と道府県農会との関係については、今後さらに研究を進める必要があるが、道府県農会というまさにそれぞれの地域の代表の農会が、中央の帝国農会を動かしたという事実が、昭和恐慌以後の農政運動のあり方の特徴であることを、本書は示したと言える。

### おわりに

以上、失礼を承知で批判を長々と述べてきた。繰返しになるが、『岡田温日記』をはじめとした史料は、著者が述べるように「生きた農政運動史となっている」（二五頁）。このような、岡田温の関係史料を発掘・整理された著者に

改めて敬意を表したい。今後の一九二〇年代から三〇年代の農政運動を検討するうえで、岡田温の史料は欠くことのできない史料であることが、著者によって明らかにされた。であるとすれば、農政運動とは何なのか、そしてそれが戦時期に向かう日本社会にとってどのような意味があつたのか、岡田温の関係史料から歴史像を構築するために、さらに検討を深めなければならない。

著者は「あとがき」で、「本書で私は研究上の一応の区切りを付けた」（二七一頁）と述べているが、むしろ、今後岡田温という人物を通じて、一九二〇年代以降の日本社会の変容を明らかにすることが、岡田の史料が「生きた農政運動史」として活かされることにつながるのではないだろうか。著者にはさらに研究を進めていただきたいが、著者だけでなく、評者を含めた研究者がその課題に取り組むことが必要であろう。

（1） 原文校閲・脚注川東舜弘『帝国農会幹事岡田温日記』

第一巻／第一巻（松山大学総合研究所報第四九、五〇・五三・五七・六四・七〇・七二・七四・七七・八五・八八、二〇〇六年／二〇一五年）。

- (2) 川東埤弘『農ひとすじ 岡田温―愛媛県農会時代―』(愛媛新聞サービスセンター、二〇一〇年)。
- (3) 松田忍『系統農会と近代日本 一九〇〇―一九四三年』(勁草書房、二〇一二年)。
- (4) 松田忍『書評 川東埤弘著『帝国農会幹事 岡田温―一九二〇・三〇年代の農政活動』上、下』(『史学雑誌』第一二五編第四号、二〇一六年) 七三頁。
- (5) 前掲『帝国農会幹事岡田温日記』(第六卷) 五〇頁。
- (6) 前掲『帝国農会幹事岡田温日記』(第六卷) 一二五頁。
- (7) この点は、松田忍氏の書評でも触れられている。前掲松田書評七〇頁。
- (8) 鈴木正幸『立憲農民党論序説』(『埼玉民衆史研究』創刊号、一九七五年)、同「大正期農民政治思想の一側面―農民党論の展開とその前提(上下)」(『日本史研究』第一七三・一七四号、一九七七年)、同「長野県における農民党運動の展開」(大江志乃夫編『日本ファシズムの形成と農村』校倉書房、一九七八年)、同「大正期農民運動の展開」(『論集(神戸大学教養部紀要)』第二二号、一九七九年)、同「立憲農民党運動の展開と帰結」(『日本史研究』第二五一号、一九八三年)、野本京子『戦前期ベザンティズムの系譜』(日本経済評論社、一九九九年)。
- (9) 前掲鈴木「立憲農民党運動の展開と帰結」。
- (10) 森武磨『戦時日本農村社会の研究』(東京大学出版会、一九九九年)。
- (11) 平賀明彦『戦前日本農業政策史の研究』(日本経済評論社、二〇〇三年)。
- (12) 前掲松田『系統農会と近代日本』三〇二頁。
- 川東埤弘著『帝国農会幹事 岡田温―一九二〇・三〇年代の農政活動―』上巻・下巻(御茶の水書房、二〇一四年七月・十一月、菊判、全一七二+xxiv頁、本体価格九、五〇〇円・一二、〇〇〇円)
- (ふかみ たかしげ・神戸市立工業高等学校准教授)